

研究報告

高齢者における公共トイレのニーズと方向性

城 憲秀¹⁾, 藤丸郁代²⁾, 山口知香枝³⁾, 白石知子¹⁾, 宮武真生子¹⁾, 堀 文子⁴⁾

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科, ²⁾中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科,

³⁾名古屋市立大学看護学部, ⁴⁾中部大学生命健康科学部作業療法学科

要 旨

高齢者の公共トイレに対するニーズを把握し、今後の公共トイレのあり方を検討することを目的として、愛知県 K 市内の高齢者 768 名を対象とする横断調査を実施した(回収率 約 74%)。高齢者全体として、散歩などの外出時にはトイレに行かない者が全体の 35%程度存在し、公共トイレの普及はなお必要であることが示唆された。また、清潔さや広さなどがトイレの質的なニーズとしてあげられており、公共トイレは質、量の両者の整備が重要である。また、高齢になるほどトイレの場所がみつけにくいことが明らかとなり、トイレの場所表示もわかりやすくしていくべきである。有疾患者、女性、後期高齢者では手すりの要求が高く、身体面でハンディキャップがある場合、身体動作をスムーズにするガイドも必須である。

公共トイレの充実は、高齢者の外出を促進するために重要な要件であると考えられ、今回調査したようなニーズを考慮し、質、量を充足していくことがバリアフリー社会の構築のためには必要である。

1. はじめに

最近の人口推計¹⁾によれば、わが国の 65 歳以上の高齢者人口は全人口の約 28%を占め、「超々高齢社会」ともいわれる状況が構築されつつある。高齢者人口の増加は、わが国の健康状態が全体として良好であるが故に起こっているのであり、社会的に悪いというわけではない。しかし一方で、高齢社会の進展は、生活習慣病や認知症など高齢者の健康リスクを増大させ、介護を必要とする寝たきり状態の者やその予備軍を増やしてきているのも事実である²⁾。これからの社会では健康寿命を延伸し、高齢者がより健康で社会に参加して過ごすことが必要であり、それが QOL の高い人生につながることをと思われる。

高齢者がより元気に社会に参加するためには外出することが一つの対策として大事であると考えられるが、反面、逆に家に閉じこもる高齢者もあり、その出現率は 10%~15%と推測されている³⁾。このような閉じこもりの背景には、加齢等による種々の身体機能の低下や基礎疾患を有することで外出がままならないことや精神心理的な課題などがあると推察されるが、早い段階で閉じこ

もりへの移行を防止し、外出できる高齢者を増加することが重要である。

高齢者が外出するにあたっては排泄に関わる社会環境を整えることも必要となる。高齢者では、加齢現象により排泄間隔の短縮や排泄器官の機能低下が起こるなど生理的な排泄問題および排泄行動に支障があらわれる。また、排泄をしたい時にトイレが近くにない、あっても使用が困難であるような状況など排泄に関する環境が整っていない場合は、外出に対する不安が生じ、外出を妨げることになるものと思われる。

外出は、身体的機能の維持・向上を図り、生活リズムが整えられ、また外出先で人と関わることで社会的孤立の防止にもなり、高齢者の心身の健康づくりに影響を与える。今後、閉じこもり予防および寝たきり防止対策のひとつとして高齢者の外出を促すことは高齢者の健康や生活を支えていくために重要な要素と考えられる。

このようなことから、本研究では、高齢者の外出状況、外出先の公共性をもったトイレ(以下、公共トイレ)に求められるニーズなどの情報を把握し、高齢者が安心して外出できるような公共トイレのあり方を検討することを目的と

して質問紙調査を実施した。

なお、本研究において、「公共トイレ」とは、外出した時に、一般的に使用するトイレのことを示し、公園など公共施設等にある公衆トイレだけでなく、デパート、スーパーマーケット(スーパー)、コンビニエンスストア(コンビニ)、病院、飲食店なども含めることとした。また、調査にあたって「外出」は「1 時間以上外出した時」と定義した。

2. 対象と方法

本研究では、愛知県 K 市内の老人クラブに所属する 65 歳以上の高齢者を対象とし、質問紙による横断調査を実施した。

1) 対象者

調査の依頼にあつては、K 市老人クラブ連絡会会議にて老人クラブ役員の方に対して調査の概要および方法などを口頭および書面にて説明をさせていただいた。その後、市内 127 老人クラブから無作為に抽出した 18 の老人クラブ代表者に書面にて説明を行った。そのうち、13 の老人クラブ代表から同意をいただき、その老人クラブに所属する 65 歳以上の全会員 768 名を調査対象とした。

2) 調査期間

調査は、2013 年 11 月～12 月の 2 か月間に実施した。

3) 質問紙の配付および回収方法

同意が得られた老人クラブ代表者の方に質問紙を会員数分送付し、代表者から全会員に配付していただいた。各対象者からの回答は、質問紙を厳封してもらったうえで、郵送にて回収した。

4) 質問調査の内容

基本属性(性別・年齢)、既往歴・現病歴、普段のトイレ

の間隔、外出回数、外出時のトイレの使用状況、手すりや壁を支えるかどうか、転倒経験、外出時のトイレの選び方、初めての行った外出先のトイレ使用で困ったこと、使いやすいトイレの条件などを尋ねた。

5) 分析方法

IBM SPSS Statistics ver.20 を用いて分析を行った。基本属性(性別・年齢別)により、分布の違いに関しては χ^2 検定、2 群間の値の差については Mann-Whitney の U 検定により比較検討した。危険率 5%未満の場合、有意差ありとした。

6) 倫理的配慮

調査にあたって、本調査は無記名自記式質問票調査であり個人のプライバシーは守秘されること、回答は自由意思であり回答せずとも不利益は生じないことなどを書面に対象者に説明した。アンケートへの回答・回収をもって、研究に同意したものとした。なお、本研究は、中部大学倫理審査委員会の承認(承認番号 No. 250025)を得た上で実施した。

3. 結果

1) 対象者の属性

質問票は 768 名に配付し、回収は 567 名(回収率: 73.8%)であつた。そのうち、基本属性に記入漏れがあつたものを除き、564 名を分析対象者とした(有効回答率: 99.5%)。

男性は 261 名(46.1%)、女性は 303 名(53.7%)、平均年齢は 78.1±6.3 歳(平均値±標準偏差)であつた。また、75 歳未満の方は 170 名(30.1%)、75 歳以上の方は 394 名(69.9%)で、75 歳以上の後期高齢者が 3 分の 2 を占めていた(表 1)。

表 1 対象者の属性

性別	人数(パーセント)	平均年齢±標準偏差	75 歳未満	75 歳以上
男性	261 名 (46.3%)	77.49 ± 5.81	86 名	175 名
女性	303 名 (53.7%)	78.58 ± 6.71	84 名	219 名
全体	564 名 (100%)	78.08 ± 6.33	170 名	394 名

2) 外出頻度(図 1)

今回の回答者においては、80%以上の者が週に 3～4 回以上の外出をしていることが判明した。性別で見ると男性のほうが毎日外出する者の割合がやや多い傾向にあった。75 歳以上か 75 歳未満(以下、年齢別という)で外出頻度をみた場合、75 歳以上で外出の頻度は下がる傾向が観察された。

3) 排泄間隔(図 2)

高齢者の普段の排泄間隔は 2～4 時間が 336 名(62.8%)と多かった。トイレの間隔時間をみると、4 時間までが 8 割を占めていることから、高齢者は外出した時には、ほぼトイレを使用すると考えてよいのではないかと推測された。性別および年齢別では、明確な差はみられなかった。

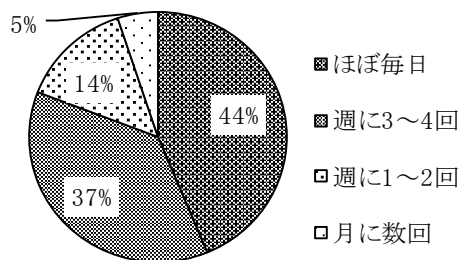


図 1 外出頻度 n=553

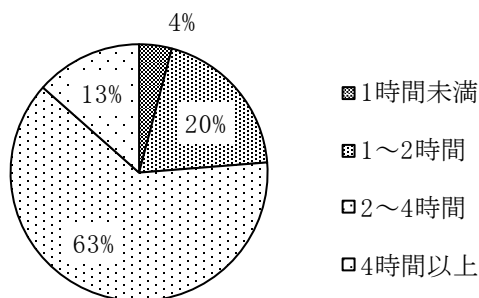


図 2 排泄間隔 n=535

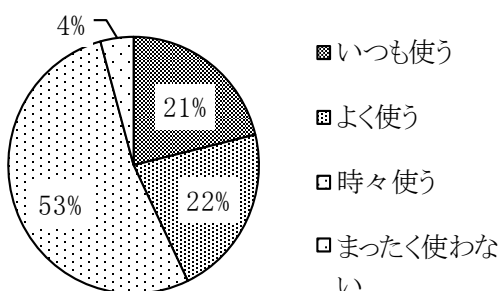


図 3 外出時のトイレ使用 n=562

4) 外出先でのトイレ使用

実際に、外出した時に「まったく使わない」は少なく、多くの方はほぼトイレを使用していた(図 3)。性別または年齢別では、差はみられなかった。

高齢者が散歩した場合、公園の公衆トイレを使用している方が 187 名(33%)と多く、買い物を目的として外出した場合は、スーパーのトイレやデパートのトイレを使用するなどそれぞれの外出先に応じてトイレを利用していた(表 2)。しかし、散歩などの際には、トイレにいかないという回答者も約 35%を占めていた。その他では、駅のトイレ、ディサービスの施設のトイレなどがあげられていた。男性は、「公園公衆トイレ」をよく使用する傾向がみられた。

5) 外出時に利用するトイレの選択理由

外出時にトイレを利用する際の選択条件について尋ねたところ、約 20%の者が「手すりのあるトイレ」を「いつも」あるいは「時々」選んでいた。「いつも洋式トイレ」を選ぶ者は半数以上いた。80%の者が「清潔なトイレ」を「いつも」あるいは「時々」選ぶと回答していた(図 4)。

「いつも選ぶ」あるいは「ときどき選ぶ」とそれ以外の回答の分布の差をみると、性別で差があった項目は、「手すりのあるトイレを選ぶ」「和式トイレを選ばない」「清潔トイレを選ぶ」「車いす用トイレを選ぶ」であり、いずれも女性の方が有意に高かった($P<0.05$)。年齢別では、75 歳以上の方では約 3 割の者が「手すりのあるトイレ」を「いつも」あるいは「時々」選ぶと回答していたのに対し、75 歳未満では 1 割強と差が認められた($P<0.05$)。また、「いつも洋式トイレ」を選ぶ者は、75 歳以上では 6 割であったが、75 歳未満では 4 割程度で有意差が認められた($P<0.05$)。

6) 初めていった外出先でトイレを使用するときに困った経験

「初めて行く外出先で困ったことがありますか」という問いに対して、「トイレが汚かった」が 135 名(31.4%)と最も多く、「荷物が置けなかった」135 名(23.9%)「和式トイレであった」130 名(23.0%)、「トイレがみつけれなかった

た」101名(17.9%)と続いた(図5)。

性別で差があった質問のうち、男性が有意に高かったものは「トイレが汚かった」「トイレが見つけれなかった」であった。一方、女性が有意に高かった質問は「トイレに段差があった」「洋式トイレであった」「流し方がわからなかった」「トイレの開閉がわからなかった」「手すりがなかった」「トイレトペーパーが交換できなかった」であった。

年齢別では、75歳以上に「手すりがなかった」「トイレが汚かった」の回答が多く、75歳未満と差がみられた。その他では、「荷物をかけるところが高かった」「トイレト

ペーパーがなかった」などの意見があげられていた。

7) 使いやすいトイレの重要な条件

使いやすいトイレの条件としては、「清潔であること」「トイレの場所がわかりやすく表示されていること」「洋式トイレ」「荷物を置ける場所があること」が続いた(図5)。

性別では、「トイレの中が広い」「荷物置ける場所があること」「トイレの開閉が簡単であること」「消音装置があること」は女性での回答が有意に高かった($p < 0.05$)。

年齢別では、「手すりがある」「和式である」「清潔であ

表2 外出目的別にみた外出時に利用するトイレの場所

使用トイレの場所	外出目的						
	散歩	買い物	趣味/ スポーツ	病院	飲食	職場	その他
行かない	200	71	94	56	75	102	56
デパートのトイレ	52	145	21	6	36	4	19
スーパーのトイレ	120	388	47	19	45	9	48
コンビニのトイレ	27	46	10	4	9	3	21
公園の公衆トイレ	187	29	176	6	14	11	54
公共機関のトイレ	76	46	210	33	20	12	49
病院のトイレ	66	46	18	476	5	5	40
飲食店のトイレ	64	77	40	17	420	6	31
職場のトイレ	3	1	3	1	0	78	7
その他/トイレ	5	5	32	3	6	8	23

表の数値は回答者数。ただし、重複回答あり。

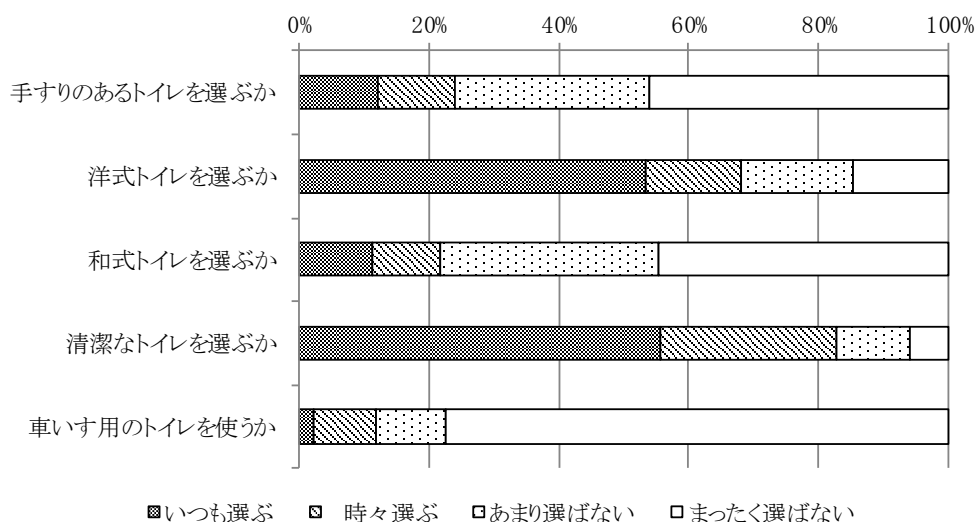


図4 外出先で利用するトイレの選択理由 n=564

る」の項目が 75 歳以上に高かった ($p<0.05$)。その他では、「ペーパーの取り出し方がわかるように」「荷物掛けのフックが低い方がよい」があげられていた。

8) 基礎疾患の有無によるトイレの条件

高齢者を治療中の疾患の有無により分類し、トイレの

条件を観察したところ、治療中の疾患がない者と最も明確に差がでたのは、手すりのあるトイレを選ぶということであった(図 7)。基礎疾患を有する高齢者は健康な高齢者に比べ、いつもあるいはときどき選ぶと応える割合が 2 倍程度高かった ($P<0.05$)。なお、今回の調査で基礎疾患として多かったのは高血圧と筋骨格系疾患であった。

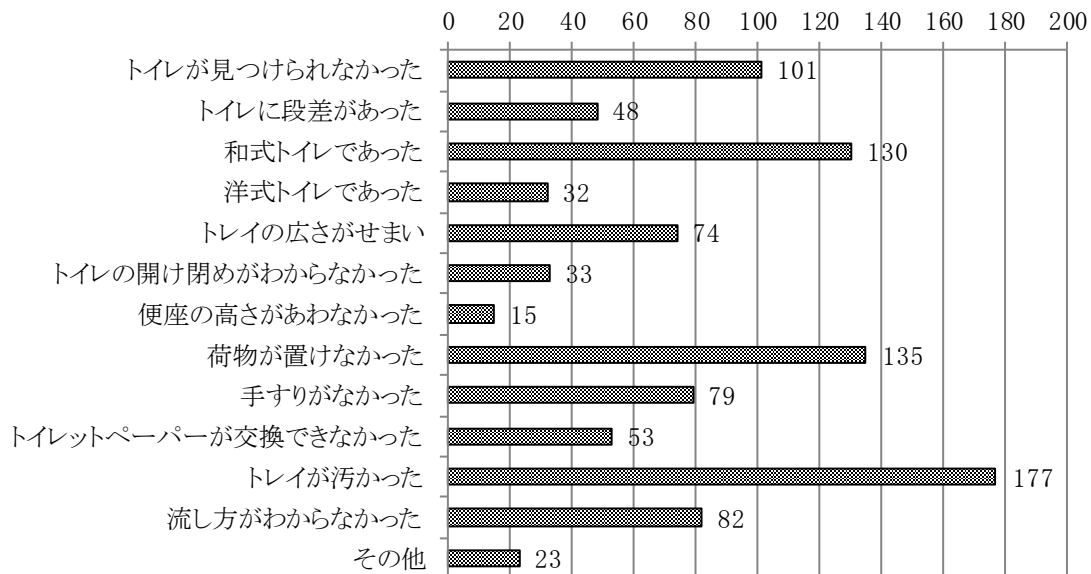


図 5 初めての場所のトイレで困ったこと
数値は回答者数, 重複回答あり。n=564

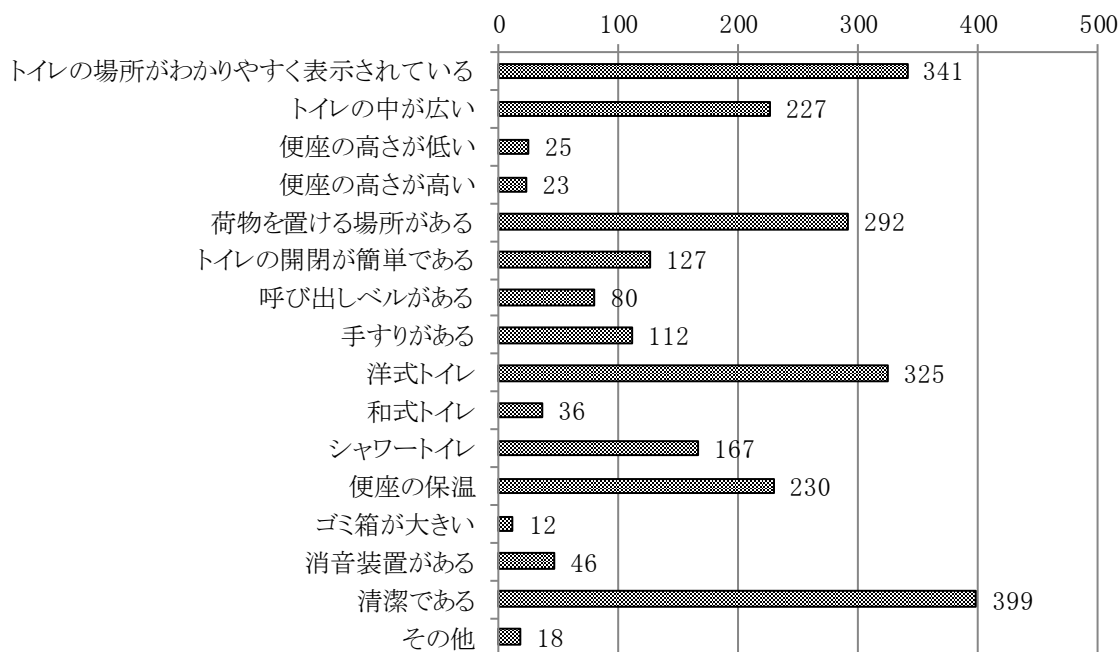


図 6 公共トイレに必要なと思われる条件
数値は回答者数, 重複回答あり。n=564

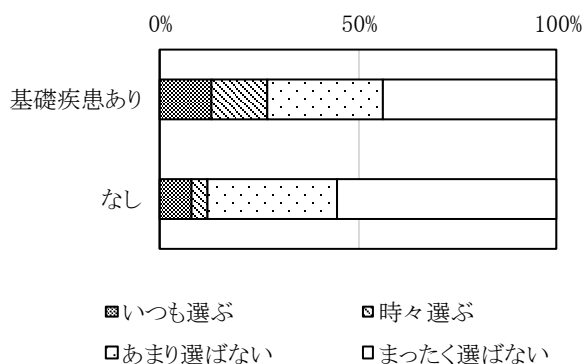


図 7 治療中の疾患の有無別にみた「手すりのあるトイレを選ぶ」割合

4. 考察

本研究は、元気な高齢者の外出と排泄状況を把握し、高齢者の外出時の公共トイレへのニーズを明らかにし公共トイレのあり方を検討することを目的に横断的な質問紙調査を実施した。

今回の調査対象の高齢者は、約 8 割が週 3 回以上の外出をしていた。これは、老人クラブに属し活動している高齢者であったため、いろいろな側面でアクティブな高齢者が多くなったものと考えられる。

これらの高齢者において、普段、起きているときのトイレの間隔は 1～4 時間が多いことから、高齢者が外出する場合には、外出先あるいは移動中に公共のトイレ施設が存在することが必須と考えられる。実際、今回の調査からも、ほとんどの高齢者が外出先の場所で排泄行動をとっていることが明らかになった。

ただし、散歩時には約 35%の回答者がトイレに行かないと応えていた。この理由として、散歩時には利用できるトイレがないか、事前に用を足してから散歩に出ているのか、あるいは単にがまんしているかということが推察できる。しかし、用を足してから外出するにせよ、1 時間以上の散歩時(今回の調査では外出は 1 時間以上とした)に散歩コースの近傍にトイレがないことは問題であり、公共トイレ施設の量的な充実はなお図られるべきであると考え。

トイレの量的な充実を提言したが、散歩時の公共トイレについては単純に数を増やせば良いというものではない。散歩時には公園などに行くことが多いと思われるが、

小さな公園では公衆トイレを管理・監視する者がおらず、治安・安全面や管理の側面で問題が起こりやすい。日本公園緑地協会⁴⁾や環境省の自然公園等施設技術指針⁵⁾では公園のトイレについては安全面、管理面での課題について認識し、地域コミュニティなどによる平常の監視、管理の必要性を訴えている。

外出先でのトイレについても高齢者は不安を持っていた。初めて場所でのトイレに関して困った経験を持つ者の割合は 75%に達し、「トイレが汚かった」「荷物が置けなかった」「和式トイレであった」「トイレを見つけられなかった」などの問題があげられていた。また、どのようなトイレを選ぶかという質問に対しては、「清潔なトイレを選ぶ」「洋式トイレを選ぶ」「トイレの場所がわかりやすい表示」「荷物を置く場所がある」の割合が高かった。このことは、トイレの重要な条件として「清潔」「トイレの場所のわかりやすい表示」「洋式トイレ」「スペース」を考慮していくことの大切さを示したものと考え。

ところで、今回、高齢者でみられた清潔さ、広さ、洋式便座というニーズは、実は若者も含む全世代にわたってのニーズでもある^{6)～9)}。これらの点の改善は一種のユニバーサルデザインとしても重要な要件と考えられる。ただし、便座に関しては、高齢者のなかには和式を希望する者も一定数おり、すべてを洋式便座とするのではなく、和式も設置することが望ましい。

トイレの場所のわかりやすい表示は、他の調査では調べられておらず、高齢者以外の世代のニーズであるか否かは明確ではない。しかし、初めて行くような場所ではトイレの場所を探すのは大変であり、高齢者に限らずユニバーサルデザインとしてわかりやすいガイド表示をしていくことが大事であろう。

とくに高齢者に特有と思われるニーズは、基礎疾患(おもに高血圧、筋骨格系疾患)を有する高齢者における手すりの設置の要望である。高血圧者ではめまいやふらつき、見えにくさなどの症状が発現することもあり、また、腰痛症など筋骨格系疾患でも身体の屈曲、伸展にあたって痛みや動きにくさが生じる。これらの疾患を保有する者ではトイレの手すりは必須の設備といえよう。さらに、結果には記していないが、手すりは女性高齢者や後期高齢者でも要望が高くなっている。超高齢社会となる

今日では、公共トイレの手すりのあり方を検討することも必要である。

2006年に制定されたバリアフリー新法¹⁰⁾では、障がい者や高齢者など社会的にハンディキャップを負った者が、移動や生活にあたって円滑に過ごすことができるように建築物や施設、道路等のバリアフリーを促進することを目指している。本研究では、高齢者が安心して排泄行動ができる公共トイレの条件として、「トイレが清潔であること」「洋式トイレ」「スペース」「トイレの案内がわかりやすく表示されている」「手すり」が必須であることを指摘した。これらの整備は、わが国が目指しているバリアフリーの精神、バリアフリー新法の趣旨にも沿っていることと思われる、改善を急ぐことが必要と考える。

高齢者が外出した時に、安心して排泄行動ができるトイレ環境整備は、地域活動や趣味・スポーツなどを促し、高齢者の外出を促進する一つの要素となるのではないかと考える。

5. 結論

本研究は、公共トイレのニーズを把握し、今後の公共トイレのあり方を検討することを目的として、愛知県K市内の高齢者768名を対象とする横断調査を実施した。回答は567名から回収されたが(回収率約74%)、回答項目の欠損等から解析には564名の回答を利用した。

今回の対象者は老人クラブに所属し、比較的外出の機会多い元気な高齢者であり、外出時のトイレに関しては、ほぼ外出先のトイレを使用していた。しかし、散歩などの外出時にはトイレに行かない者が全体の35%程度存在し、公共トイレの普及は今なお必要であることが示唆された。

また、トイレの質の課題として、清潔さや広さなどがニーズとして認められた。また、高齢になるほどトイレの場所がみつけにくいことが明らかとなり、トイレの場所表示もわかりやすくしていくべきである。有疾患、女性、後期高齢者では手すりの要求が高く、身体面でハンディキャップがある場合、身体動作をスムーズにするガイドも必須である。

公共トイレの充実、高齢者の外出を促進するた

めに重要な要件であると考えられ、今回調査したようなニーズを考慮し、質、量を充足していくことがバリアフリー社会の構築のためには必要である。

6. 謝辞

調査にご理解とご協力いただいた愛知県K市老人クラブ連合会、老人クラブ役員、老人クラブ会員の皆様に深く感謝いたします。また、老人クラブ連合会との調整を図っていただきましたK市高齢福祉課の担当者の方々に御礼申し上げます。なお、結果の一部は第73回日本公衆衛生学会(宇都宮, 2014)、第52回人類動態学会全国大会(春日井, 2017)において発表した。また、研究の一部は平成25年度中部大学特別研究費A(24IM30A)による。

引用文献

- 1)総務省統計局(2018) 人口推計 平成30年1月報,
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201801.pdf>.
- 2)内閣府(2017) 平成29年版高齢社会白書.
- 3)厚生労働省「閉じこもり予防・支援マニュアル」分担研究班(2009) 閉じこもり予防・支援マニュアル(改訂版).
- 4)一般社団法人 日本公園緑地協会(2012)平成24年度公園緑地マニュアル 公園のトイレについて.
- 5)環境省(2014) 自然公園等施設技術指針 平成26年改定 第3部第5章公衆便所(自然地域トイレ含む), 公衆便所 1-28.
- 6)公衆トイレに関する検討協議会(2004) 公衆トイレのあり方についての提言.
- 7)第一生命(2005) 20~79歳の男女600名に聞いた『公共トイレに関するアンケート調査』~利用者からみた公共トイレの管理と利用のあり方~, 第一生命 NEWS 宅配便, 1-13.
- 8)山浦利昭, 青葉政宏, 木村雄太郎, 内田浩章, 藤原佑起, 石原凡子(2013) 新規採用職員研修(後期研修)による政策提案, 安心して使える「公衆」トイレ, かながわ政策研究・大学連携ジャーナル, No.5, 54-57.
- 9)山形行政相談委員協議会(2013) トイレに関する調査(結果報告書).

10) 高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律(2006).

Title: Needs and orientation of public lavatories among the elderly in Japan.

Author(s): Norihide Tachi¹⁾, Ikuyo Fujimaru²⁾, Chikae Yamaguchi³⁾, Tomoko Shiraishi¹⁾, Makiko Miyatake¹⁾, Fumiko Hori⁴⁾

Address(es): ¹⁾Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan; ²⁾ Department of Lifelong Sports and Health Sciences, College of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan; ³⁾ School of Nursing, Nagoya City University, 1 Kawasumi, Mizuho-cho, Mizuho-ku, Nagoya 467-8601, Japan; ⁴⁾ Department of Occupational Therapy, College of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan.

Keywords: Elderly, Public Lavatories, Needs, Universal Design, Barrier Free.